

# 陳舜臣さんを語る会通信

NO.45 Sep. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年9月1日

## 地方紙20数社が連載した『夢ざめの坂』

『夢ざめの坂』は、初出、徳島新聞夕刊に、1989年9月1日～90年9月5日、連載されました。陳舜臣作品の新聞連載については、本通信44号で陳さんのことばを掲載しています。それによると、全国紙、地方紙合わせて11本で、その内、『夢ざめの坂』は、地方紙20数社が連載したということです。最多記録です。

ここでは、講談社文庫版（1994年）を使用します。（編集委員 橋雄三）

### 「内容紹介」 文庫本キャッチコピーより

#### 「上巻」

文化教室を営む浦上隆志を訪れた初対面の女性杉坂房子は、こともあろうに失踪した夫を探してくれと隆志に頼む。その夫伊庭潤は一年前、水墨画教室に在籍したのだという。隆志の奇妙な失踪人探しが始まった。

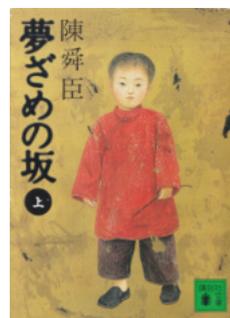
いつかおちいる房子との恋。その語らいの中に浮かび上がる隆志の生いたち。滋味溢れる推理長編。

#### 「下巻」

失踪した夫探しは、浦上隆志をはからずも日中戦争の裏面史へ引きずりこんだ。民族抑圧に抗した明末清初の画家八大山人への敬慕。中国の故事「衛石」に託して描く日中戦争下の知日派中国人の苦悩。しだいに明らかとなり、上海に見えかくれする主人公半生の謎。悠々たる筆致でつづる物語は意外な展開に！



（画像は講談社文庫版表紙）



### 権田萬治氏の解説から抜粋・引用 傍線は編集委員の加筆

陳舜臣氏は常に、歴史の激動の中で生きる人間を凝視し、民族の誇りを失わず、権力におもねらない人間を、優しい共感をもって眺めている。

長編ミステリー・ロマンともいえるべき本書『夢ざめの坂』の魅力もまた、そういう点にあるといえよう。

#### 杉坂房子の伊庭探しに協力する 浦上隆志の心情

杉坂房子の伊庭探しに協力する気持ちになったのは、房子に魅力を感じたせいもあるが、一つには伊庭が行方知れずになった自分の母と妹と再会したいという夢を捨てきれずに家を出たらしいからだ。

実は、浦上自身、中国の上海で日本人の父親と中国人の母親の間に生まれたが、父親は終戦直後に病死。父の弟である叔父の家に引き取られ、日本への引き揚げも叔父一家と一緒だった。以後、母親には会っていない。それだけに母への思慕の念が強く、伊庭の心情もよく理解できるような気がしたのである。



（画像は1928年の外滩。Wikipediaより）

『夢ざめの坂』の導入部は、まず、こういう発端のミステリアスな状況と、同時に浦上が次第に房子に惹かれていく恋愛小説的な要素で、読者の興味をかき立てる。

#### 作者の意図、作品の魅力

ミステリーの手法を駆使しながら、実は、歴史の激動の中で、抵抗の精神を持続し続けた人々の個性的な肖像をさりげなく浮き彫りにするというのが、作者の意図なのである。

そういう意味で注目されるのは、太平洋戦争中の上海の状況が作中で、弓満という人が書いた『孤島にて』という小説の形で描かれていることだろう。

『孤島にて』の中には、身の危険にさらされながら、黙々と地下抗日抵抗運動に従事する一人の男と人妻との出会いが描かれている。こういう命懸けで、民族的な誇りを守ろうとする人々を作者は、畏敬の念をもって描き続けて来たのである。

主人公の恋愛や母親捜しとからめてミステリー的手法で浮彫りにされている所が、この作品の最大の魅力といえるだろう。

## 『夢ざめの坂』 主な登場人物 及び 「上海ブルースの世界」

## 主な登場人物(ネタバレにならない程度に)

- 浦上隆志 主人公。浦上ビルオーナー。戦争中の上海で生まれる。父は終戦直後に病死。叔父一家と引揚げ。母親は中国人。引揚げ後、母親には会っていない。
- 浦上晴子 隆志の妻。22年連れ添い、亡くなつて一年になる。
- 塩村真弓 商社員の妻。アメリカなど、海外暮らしの経験がある。浦上ビルで英語教室を開く。受付なども手伝っている。浦上晴子と一緒に海外旅行をする仲だった。
- 杉坂房子 夫・伊庭潤を探してほしいと浦上ビルを訪れる。外国の美術工芸品の輸入販売、アートチャート・スギサカ経営。
- 伊庭(いにわ)潤 母親と妹を探している。小学校に入る前にシンガポールから来た老華僑のところに養子に出される。伊庭という姓は養父が日本国籍を取ったときにつけた苗字。潤という名も養父がつけたいらしい。その資力でイギリスに留学。留学中に養父が病死。ロンドンの美術商の店員となる。
- ドクター・リップマン 杉坂房子の仕事上のチームの参謀、相棒。大学の医学部で解剖を専攻。化石人類の研究者でもある。消えた北京原人の頭蓋骨に興味を持つ。「お話づくり」が好き。
- 悟心尼(ごしんに) 御影にある般若庵の庵主。母の死後、寧波の尼寺で修行。30年前日本へ。浦上隆志より少し若い。



(リラの花)

- 竹浜弘子 悟心尼の助手、秘書。日本人との間に息子・ジョンをもうける。離婚後、李という五十男の華僑と結婚。多額の現金不動産をせしめ、別れる。李がジョンを可愛がったこともあって、ジョンは李が育てることに。その後、アメリカ人との間に娘・マーガレットをもうける。
- 岡村奈津子 通称、ナンシー。東門筋にあるスナック「ナンシー」のオーナー。店は娘夫婦に任せている。かつて、上海でダンサー。
- 鈴木スマコ 奈津子の娘。スマコの「スマ」は四馬路の「スマ」という。
- 安西マリ 偽名らしい。岡村奈津子の相棒だった。「割り切り女」の異名をもつ。
- 森田警部 岡村奈津子が暴漢に襲われるという事件が起き、調査にあたる。以前から、岡村奈津子、安西マリを調べており、二人について、かなりの情報を持つ。
- 康基(こうき) 上筒井にある喫茶店「リラ」のオーナー。
- 紅蘭 康基の娘。悟心尼の弟子。
- 黄明日(こうめいじつ) 喫茶店「ゴールデン・ゲイト」のマスター。通称「アシタ」。
- 梁培海 八大人人のコレクター。「自分は八大人人と同じ遺民だ」との思いが強い。
- 弓満(ゆみ) 孤島にて』の作者。本名、梁延宜。
- 月英(げつえい) 中国人。戦時下の上海で抗日運動。同じ志を持つ日本人の夫との間に男の子。弓満とは幼馴染み。それ以上。

## 物語の根は上海に 「上海ブルース」の世界

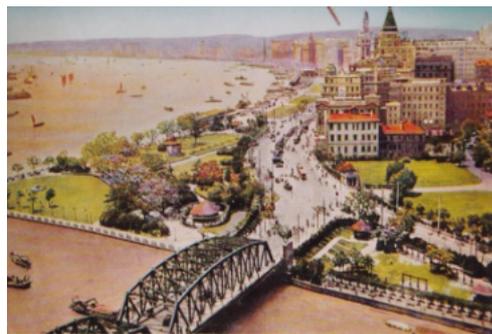
リラはフランス語でライラックのはずである。もくせい科の植物だが、上海から引揚げた隆志たちにとっては、それはある種の感傷を誘う名である。

上海をテーマにした、戦前の流行歌の歌詞に、リラの花が咲く宵に、愛する人をおもい出す、という意味のくだりがあった。リラといえば、上海の四馬路やイギリス総領事館の近くにあって、ガーデンブリッジが連想される。(上 p.33)

♪ 涙ぐんでる 上海の  
夢の四馬路の 街の灯  
リラの花散る 今宵は  
君を想い出す  
何も言わずに  
別れたね君と僕  
ガーデン・ブリッジ  
誰と見る青い月

「上海ブルース」は一九三八年にできた歌です。私はこの歌が好きで、カラオケでよく歌います。

陳舜臣さんは作中、喫茶店の名に「リラ」を使い、鈴木スマコの「スマ」は四馬路のスマだと言っています。ところで、外灘は英語名、バンドですが、昔、上海にいた日本人の集まりとして、「バンド会」を筋に絡めます。



手前、ガーデン・ブリッジから外灘を望む

戦時中の上海は別天地であった。太平洋戦争が勃発すると、日本軍は外国租界を接收した。だが、それまで上海のもっていた、国際的な雰囲気や自由の気風といったものは、まだ、残っていた。それが、自由にあこがれる人々を誘い寄せたのである。とくに身一つで上海に来た日本の女性のなかには、過去のどこかに暗い部分があり、それを消すために来た人もいた。

(上 p.165)

はちだいさんじん  
陳舜臣さんは、八大山人(1626?-1705?) や梁さんを共感を持って描きます

陳さんは『夢ざめの坂』の章、「秋風白」「遺民」「涙点多し」で紙幅を割いて八大山人と梁という八大山人コレクターについて詳述します。二人を繋ぐのは、新来の侵入者に阿ることのない「遺民」の心情でしょうか。

芦屋の山手に住む高田という引退実業家の夫人が、宋代の白磁鳳首壺、油滴天目、明・清の絵画数点など、名品を手放したがついているという情報を掴み、ドクター・リップマン、杉坂房子、浦上隆志は高田邸を訪れます。

### 《1. 「秋風白」の章》

絵画四点はすべて軸物で、壁にかけられていた。

四点の絵画のなかで、隆志が作者の名を知っていたのは八大山人だけであった。八大山人は明末に生まれ、二十歳前後のころ明王朝が滅亡した。彼は石濤とならんで、清初最高の画人とされている。個性的な作風は、つぎの世代の揚州八怪にうけつがれた。

八大山人の絵は水墨の山水である。隆志は房子から、その絵が「秋風白」と呼ばれていると聞いていた。秋の風景だけあって、さびしげである。左下は河か池のようにみえ、岩山がその上にあり、段状の道が頂上あたりにつづく。右がわは野原のようになっていて、山水画としても空間が多い構図である。右肩に、

秋野白 秋風白

と、しるされている。秋の野原は白く、秋風も白い、という意味である。これは唐の李賀という詩人の「南山田中行」と題する作品の冒頭の句だが、隆志はこれも房子に教えられていた。(上p. 188)

ところが、この「秋風白」は偽物でした。

### 《2. 「遺民」の章》

「秋風白」の本物を所有する梁という八大山人コレクターについての紅蘭と隆志の会話です。

「(梁さんは)絵が好きだというほかに、八大山人その人が好きだったようです。あたし、あの人からなんどもききました。……自分は八大山人とおなじ遺民だ、ということをしる」

「イミン？」

「遺された臣民です。八大山人は明王朝の皇族でした。明がほろびて、満州族の清王朝となりますと、新王朝に仕えない人たちは、遺民と呼ばれたそうです。……八大山人も明の遺民と称していましたが、梁さんは海外に出て、国籍はもうマレーシアになっているのですが、精神的には中国の遺民だとおっしゃるのです」(上p. 224)

「梁さんは、日中戦争が始まったころ、まだ中国にいました。日本占領下で、遺民になったのです。土地の有力者だったので、日本軍に協力するように

依頼されたのですが、一切の職につきませんでした。遺民の道をえらんだのです」(上p. 225)

### 《3. 八大山人のサイン「哭之」》

紅蘭の語りは続きます。

「八大山人の号を使ったのは、六十になってからでした。それは、あの字を崩すと、コレヲ哭ク、となるからです。コレというのは、明王朝の滅亡でしょうが。……そうなの、八の字を両側から丸めるようにして書けば、二つの口ができます。それに大をつけると哭です。山人をつづけて書けば、之という字に似ます。……あの秋風白のサインは、ほかの絵のサインにくらべて、いちばんはっきりとそう読めます。梁さんがあの絵を気に入ったのは、そのためでしたから」(上p. 233)

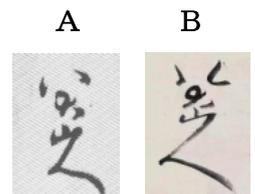
### 《4. 陳舜臣『中国画人伝』》

『中国画人伝』「八大山人」の冒頭です。

八大山人のえがく鳥は、すべて屹然とした姿勢をとっている。その目は鋭く、人間の理不尽を許さず、あくまでもなにもものかにはむかおうとしているかにみえる。じっと見ていると、その目に抵抗の光をともしたいたけのために、鳥を描いたという気がしてくる。

陳さんはこの文章に、下の絵を添えています。

この絵の署名を拡大したのが右のAです。八大山人の別の絵では、Bのような署名もあります。「哭之」というより、人の顔に見えますが…。



陳舜臣『中国画人伝』「八大山人  
花卉雜画冊」より

あと、「涙点多し」の章については次ページでふれます。

